

式 辞

厳しかった冬もようやく終わりを告げ、緩んだ気温に心なしか気持ち華やぐようになってきました。確実に春は訪れる、改めてそう思います。4月に入り、いよいよここの十勝も色鮮やかな春の賑わいを見せ始めています。

このような良き日に、帯広大谷短期大学第57回入学式を、音更町議会議長佐藤和也（さとつかずや）様をはじめとして多くのご来賓、保護者の皆様の見守る中、挙行できますことは帯広大谷短期大学教職員にとりまして、誠に喜ばしいことと思っております。厚く御礼を申し上げます。

さて、ただいま入学を許可いたしました地域教養学科32名、生活科学科栄養士課程31名、社会福祉科子ども福祉専攻71名、同介護福祉専攻32名、総計166名の皆さん、ご入学、誠におめでとうござります。

今、皆さんは希望と不安の真只中にいることと思います。新しい環境に入るといふことは、そんな気持ちと上手に付き合いながら、動き出していくということに他なりません。どうか、楽しいことや嬉しいことを中心に据えて、不安や緊張を、あえて、楽しみながら、これからの学生生活をスタートしてください。

さる3月17日金曜日に132名の学生たちがこの学び舎を巣立ってゆきました。それぞれが新しい環境に今この瞬間に飛び込んでいるのです。2年前に皆さんと同じように緊張をし、来るべき未来に期待を

し、そしておどおどしていた、そんな学生たちが今や、社会の新しい構成員として再び緊張の最中にいるのでしよう。新入生の皆さんも今まさに興奮と緊張の中、これからの学生生活に胸をときめかせているのだと思います。将来の夢に向かって勉強を頑張ろう、サークル活動を積極的に行って、たくさんの友達を作ろう、ボランティアに積極的に出向いていこう、などなど。どうかこれからの帯広大谷短期大学における学生生活に多くの期待をしてください。皆さんが充実した生活を送れるよう、教職員一同、精一杯の支援をこの場を借りてお約束いたします。

さて、私は先の1月に行いました「プレ・カレッジ」の中で本学の「建学の精神」についてお話をいたしました。多くの皆さんはその場に参加し、私の話を聞いてくれたことと思います。繰り返しは避けませんが、つまり、我々は今「奇跡のいのち」を生きているということ、だから可能な限り自分の都合で勝手に止めたりしないで、生きつづけていかなければならないこと。これらについて、両手両足を失ってもなお生き抜いた中村久子さんの人生や、病と共生する境地に達した高校生・高間史絵さんの感動的な作文と一緒に確認しながら、「いのちの尊厳」について体感してきたわけです。人は何かができたから立派でえらく、できないからダメである、といったレッテルを貼ってはいけません。物事を成果・結果で判断してはいけません。そこに至るまでのプロセスこそに意味があり、そこにこそ中村久子さんや高間史絵さんのような「輝けるいのち」の価値が有るのです。

女性詩人・金子みすゞの有名な詩に次のような歌があります。

私が両手をひろげても、 お空はちつとも飛べないが、
飛べる小鳥は私のように、 地面を速く走れない。

私が体をゆすつても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴る鈴は私のように、
たくさんな唄は知らないよ。
鈴と、小鳥と、それから私、
みんなちがつて、
みんないい。

あまりにも有名ですので、皆さんもご存知な方が多いと思います。みずぶがいうようにみんな違って全く構わないのです。鳥には鳥の、鈴には鈴の、そして私には私の良さがある。全ての存在を認め合いましょ。そして決して自分を卑下したりすることなく、自分を愛してください。それらが大きな力となって皆さんの将来の可能性が開かれていくのだと思います。

どうか、一人一人のこれからの2年間で、それぞれに価値が有る有意義で輝きに満ち溢れた時間になって欲しいと期待しております。

保護者の皆様、本日は誠におめでとうございました。今日の学生諸君の誇らしい姿をご覧になり、ホッとされていることと存じます。しかし、彼らはまだスタート地点に立ったにすぎません。これから楽しいことばかりでなく、辛いこと悲しいことをたくさん経験しながら学生諸君は成長し、情感溢れる豊かな大人になっていくのだらうと思います。

私どもも精一杯学生と共に泣き、そして笑いながら生活をしていくつもりでおります。至らぬところも

多かろうと思えます。何かございましたらぜひ、お声をかけてください。一緒に、この前途有望な若者たちを育てていきたいと願っております。

最後になりますが、本日もご参会頂きました多くのご来賓の皆様、保護者の皆様のご健勝とご発展、そしてこの166名の新入生たちの前途に幸あらんことを心から祈念いたしました。私の式辞とさせていただきます。

2017年4月3日

帯広大谷短期大学長

田中 厚一